

▶創業当時、明治天皇や伊藤博文といった有力者を顧客に活躍した柴田音吉洋服店。洋服のアドバイスやアフターケアも手掛けていた。



↓よく使用する道具のひとつがアイロン。これはあまり使われなくなったガス式。さらに昔はアイロンを火で直接焼いて使った。



テラーは衣生活の助言者

近代洋服発祥の地の顕彰碑が立つ神戸。明治2年、英吉利人P・S・カベルドの開業をきっかけに、この後日本人が相次いで紳士服店を開業している。

カベルド門下で、明治16年に神戸で創業した柴田音吉洋服店（詳細は94ページ）は、現在商いを続ける最古の老舗。頑なに手作りの良さを守り続けるテラーである。

4代目・柴田音吉さん（50歳）は次のように言う。

「天皇や皇族のお住まいに入れた民間人は医者や洋服屋だけだ、という昔の話をよく聞きました。当時は、単なる仕立屋ではなく、衣生活のアドバイスや新しい知識を伝える特別な存在だったそうです。今は、そんな役割が薄れ、洋服のルールやマナーもどんどん忘れられてしまっています。アドバイザーとしての責任も果たしていきたいですね」

外来物全てが珍しい時期に、知識の上でも、技術においても、テラーが果たした役割は大きい。洋服職人という立場から西洋に深く接した見聞は、テラーを窓口にした庶民へ伝えられていったのである。

今もテラーは身近にあり豊かな衣生活を担っている。が、一見料金が高そうに見えるので、店に入りにくい感があるが、仕上りの良さを知ると納得がいく。語らうを楽しみながら、是非とも一着仕立てたい。

◀「テラーは、洋服のアドバイスから服の手入れまで面倒を見るファッション・ドクターであるべき」と話す、4代目・柴田音吉さん。



↑大正の初め、洋服が庶民にも浸透し始めた頃、テラーは勃興期を迎える。100名あまりの丁稚を抱えていた柴田音吉洋服店。

